

5 年 2 組

自然のもので染めたい！
～自分だけの模様・色を求めて～



藍染にチャレンジ

4月、昨年度ピザづくりをした子どもたちに衣食住の「衣」として「藍染」を紹介しました。紹介したのは、松代で染物店をしている方の染めた着物と、白いTシャツと私が藍で染めたTシャツです。子どもたちは私の染めたTシャツを見て「それ先生が染めたの?」「その模様どうやってつけたの?」「きれいな色だね」など口にししました。子どもたちに白いTシャツに自分だったらどんな色で、どんな模様をつけたいか尋ねると、緑や黄色、紫などさまざまな色をつけていく子どもたち。また、クラスユニフォームをつくりたいと考えた子もいました。Tシャツだけでなく、靴や帽子を染めたいと考えた子もいました。そこで、どんな模様ができるのか試すために、実際に藍染を試みることにしました。

わー!きれい!

はじめて染物をするので、どんな手順で染めていくのかわからない子どもたち。輪ゴムやビー玉を使って模様がつくように工夫していきました。渦をまいたような模様をつけるために布をぐるぐる巻いたり、折りたたんで輪ゴムで止めたりする子どももいれば、割りばしで挟んで線をつけてようとする子どももいました。みんな染めた時にできる模様をイメージして準備をしていきました。



いざ実践!「これでいいのかな?」恐る恐る藍染の液に布を入れていく子どもたち。すると「色が変わってく!」とつぶやくAさん。緑色の液が空気にふれるとどんどん藍色になっていきました。思っていなかった色の変化に驚いていました。水で余分な染料を落としてから布を開いてみると・・・「わー!きれい!」とBさんは目を輝かせていました。偶然にできた模様と色の入り具合で、この世に一枚しかない、自分だけの藍染の布ができました。Cさんが「これハンカチにできるかな?」、Dさんが「早く持って帰りたい!まだ持って帰っちゃダメなの?」というように、自分で染めた布に満足している姿がありました。一方で「先生のTシャツみたいな模様がつけたかったな」と残念がっている子もいました。偶然にできた模様を楽しむ子と、願いをもって模様をつくらうとしている子がいることがわかりました。一人一人願いがあり、それぞれが追究していける可能性を感じました。

自然の物で染めるのがいいんだよ!

藍染のあと、どんな色に染めていきたいか尋ねると、緑、黄色、青、紫、オレンジ、など様々な色が出てきました。藍以外で染色液ができそうなものを聞くと、いろいろな材料が出てきました。絵の具という意見もあり、私は「簡単なものからはじめればいいのか」という考えが浮かびましたが、子どもたちは「自然のもので染めたい!」と言いました。「自然の物で染めるのがいいんだよ」という言葉に、以前染物職人さんにお話を聞いた時のことを思い出しました。自然の物のよさを感じている子どもたちの感性に感心させられました。そこで学校の構内で染色液にしたときにきれいな色が出せそうなものを探しました。タンポポやオオイヌノフグリなど、きれいな花がまだ咲いている時期でした。「草なら緑色が出せるんじゃない?」「タンポポって黄色になるかな?」「校門のところのピンクの花使っていいかな?」など、自分のめざす色をイメージして草木を探していきました。

色が出ない・・・

煮詰めたら染色液ができるということを調べた子どもたちは、集めた材料を思い思いの方法で染色液にしていきました。ただ煮詰めるだけでは色が出ないと考えた子どもたちは、すりつぶしてから煮詰めました。するときれいなピンク色の液ができていきました。また緑色をつくるためにたくさんの草をとってきた子どもたちもいました。緑色の液はできたもののちょっと色が薄い気がしました。いよいよ、布を染めてみると・・・ピンク色の花を使ったものは濡れているときはきれいな色をしていたのに、乾かすと薄い色に。草をつかって緑色をつくった子たちの布は、ほとんど染まりませんでした。「薄いよお」と嘆くEさん。「ほとんど色がつかない」と残念がっているFさん。「なんでかな？」と疑問を口にするGさんもいました。そこには思い描いていたように染まらない布を見て、なぜなのかを考える子どもたちがいました。「自分たちはまだ草木染の方法がわかっていない」と感じた子どもたちは、草木染を一から学びたいと思い、職人さんに話を聞きたいと考えました。そこで、長野市で草木染工房を営んでいる林部貢一さんに草木染の仕方を教えてもらうことにしました。

林部さんにインタビューするためにインタビューの仕方を学び、準備を整えていきました。貴重な機会をものにしようとしてインタビューの練習と質問の質を考えていく子どもたちの姿がありました。

次は枇杷(びわ)やりんごの木で染めてみたい

林部さんの講義当日、林部さんに会うのが楽しみでそわそわしている子どもたちがいました。「うまくインタビューできるかな」と心配している子もいました。林部さんから「布の下準備のこと」「木の板をつかった模様のつけ方」「最後に媒染すること」などを教えていただき、これから草木染をするためのヒントをもらいました。ソルガムをつかった草木染をして、きれいに色がつく工程を体験することができました。また、林部さんへのインタビューで「草木染のよさ」や「林部さんが草木染をはじめたきっかけ」などを教えてもらいました。インタビューの練習の成果を発揮する機会ができ、子どもたちのがんばりが伝わってきました。インタビューの中でHさんが「きれいに色がでる植物はありますか？」と質問をしました。「枇杷やりんごの木で染めてみたい」と願いをもちました子どもたちがいました。この日、林部さんの指導で染めた布を給食の三角巾として使う子やナフキンとして使う子、お家の方にプレゼントする子などがいて、私は林部さんと出会えてよかったと思いました。

その後、いくつかの候補にしばらく、枇杷、りんごの木で染めてみることにしました。枇杷の葉をもらえる算段がついたので枇杷の葉で染色液をつくる方法をもう一度林部さんに教えてもらうことにしました。枇杷の葉を煮詰めていると「かぼちゃのにおいがする」と日常生活で出会ったにおいを思い出している子もいました。自分たちでつくった染色液につけてみると・・・はじめは茶色だった布が空気にふれるとピンク色を変わっていきました。布をみつめ「きれい～!」と喜ぶIさん。「いい模様ができたよ!」と私に伝えてくれるJさん。以前の失敗のときと比べて明るい声が聞こえてきました。

今回の講義で、一度染色液を寝かせることや、煮込み時間で色が変ることなどがわかってきました。これからは自分たちで草木染ができるようになっていってほしい。色を追究していくのか、模様を追究していくのか、何を最終的に染めていきたいのか、子どもたちがつくりあげていく自分たちのだけの色が楽しみです。

